

2008年10月23日

報道関係各位

三井不動産株式会社
東京ミッドタウンマネジメント株式会社

次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘
「Tokyo Midtown Award 2008」結果発表



2008年10月23日（木）～11月3日（月・祝） プラザB1F メトロアベニュー展示スペースにて展示

＜Tokyo Midtown Award 2008 受賞作品＞

デザインコンペ：テーマ『Japanese New Souvenir 日本の新しいおみやげ』

「一般の部」グランプリ（賞金100万円）

受賞者：近藤 真弓

受賞作『さくら石鱈』

「学生の部」グランプリ（賞金50万円）

受賞者：愛知教育大学 4回生 望月 未来

受賞作『HINOMARU』

アートコンペ：テーマ『JAPAN VALUE』

準グランプリ（賞金50万円）

受賞者：榎本 佳子

受賞作『pottery』

※最年少受賞者：佐藤栄学園 栄東高等学校 1年 鯨井 みなみ（15歳）

受賞作『Sushi 侍すとらっぷ』（審査員特別賞 原研哉賞）

東京ミッドタウン（事業者代表 三井不動産）は、JAPAN VALUE（新しい日本の価値・感性・才能）を創造・結集し、世界に発信し続ける街づくりを進めています。その一環として、今年度より、「Tokyo Midtown Award」を開催。本日、受賞結果を発表し授賞式を行いました。

「Tokyo Midtown Award」は、次世代を担うアーティスト、デザイナーとの出会いと応援を目指し、幅広く参加作品を募集。記念すべき第1回目となる今回は、「アートコンペ」「デザインコンペ」の2部門で14点の受賞作品を選出しました。

受賞作品の展示は、本日から11月3日（月・祝）まで、東京ミッドタウン プラザB1Fメトロアベニュー 展示スペースにて実施。展示期間中、来街者投票により東京ミッドタウン・オーディエンス賞を決定します。（受賞作品は、11月3日（月・祝）21：00に現地にて発表いたします。）

各部門の詳細、受賞作に関しましては次頁以下をご参照ください。

<デザインコンペ>

デザインコンペは、「Japanese New Souvenir 日本の新しいおみやげ」をテーマに、海外を含め一般の部に713件（応募者536人（組））、学生の部に389件（応募者353人（組））、総計1,102件（応募者889人（組））の応募がありました。

14歳の中学生から73歳まで、幅広い応募の中から、「一般の部」「学生の部」それぞれにつき「グランプリ」各1人（組）、「準グランプリ」各1人（組）、「佳作」各1人（組）の計6人（組）を選出。審査員各自が選んだ審査員特別賞計5名も選出しました。

なお、今後東京ミッドタウンでは受賞作の商品化サポートを行っていく予定です。

[一般の部]

グランプリ（賞金 100 万円）

■受賞者：近藤 真弓（東京都）

受賞作：さくら石鹸

内 容：桜の花びらに見立てた石鹸



さくら石鹸(一般・グランプリ)

準グランプリ（賞金 50 万円）

■受賞者：ワビサビ（北海道）

受賞作：AIR-BONSAI（エアボンサイ）

内 容：盆栽を模したビニール人形



AIR-BONSAI (一般・準グランプリ)



よろいT(一般・佳作)

佳作（賞金 30 万円）

■受賞者：YEN!（東京都）

受賞作：よろいT（ヨロイティ）

内 容：鎧をモチーフにしたTシャツ

[学生の部]

グランプリ（賞金 50 万円）

■受賞者：望月 未来（愛知県）

愛知教育大学 4 回生

受賞作：HINOMARU（ヒノマル）

内 容：日の丸をイメージしたペーパーウェイト



HINOMARU(学生・グランプリ)

準グランプリ（賞金 30 万円）

■受賞者：小島 梢（神奈川県）

武蔵野美術大学 4 回生

受賞作：JAPANESE、FACE（ジャパニーズ、フェイス）

内 容：顔型を施したフェイスパック



JAPANESE、FACE(学生・準グランプリ)

佳作（賞金 10 万円）

■受賞者：居郷 翔（東京都）

千葉工業大学 4 回生

受賞作：水引香（ミズヒキコウ）

内 容：香りをテーマにした水引



水引香(学生・佳作)

[審査員特別賞]

小山薫堂賞

受賞者：富田 知恵（千葉県）

受賞作：つまらないものですが。

内 容：パッケージ等に同居させやすいステッカー



つまらないものですが。（小山薫堂賞）

柴田文江賞

■受賞者：竹内 真里子（東京都）

受賞作：Moustache FUJI（マスタッシュ フジ）

内 容：髭と富士山を組み合わせたつけ髭



Moustache FUJI(柴田文江賞)

内藤廣賞

■受賞者：村山 譲治（埼玉県）

受賞作：くつくつした

※商品化決定：砂山靴下株式会社

内 容：靴をデザインした靴下



くつくつした（内藤廣賞）

原研哉賞

■受賞者：鯨井 みなみ（埼玉県）

佐藤栄学園 栄東高等学校 1 年

受賞作：Sushi 侍すとらっぷ（スシザムライストラップ）

内 容：寿司と侍を組み合わせたストラップ



Sushi 侍すとらっぷ（原研哉賞）

水野学賞

■受賞者：鈴木 啓太（東京都）

受賞作：富嶽百三十九景（フガクヒャクサンジュウキュウケイ）

内 容：富士山の絵を重ねたグラス



富嶽百三十九景(水野学賞)

各受賞作品画像は以下のURLよりダウンロードいただけます
http://www.tokyo-midtown.com/press/index_press.html

<ご参考：デザインコンペ概要>

応募期間：2008年6月30日～8月12日

応募総数：1102件（一般の部：713件、学生の部：389件）

審査方法：1次審査→2次審査→最終審査 ※全て書類審査による

審査員：小山薫堂（放送作家）

柴田文江（インダストリアルデザイナー）

内藤 廣（建築家 / 東京大学大学院教授）

原 研哉（グラフィックデザイナー）

水野 学（アートディレクター）

協力：東京ミッドタウン・デザインハブ

<アートコンペ>

アートコンペは「JAPAN VALUE（新しい日本の価値・感性・才能）」をテーマに、約2ヶ月間で国内外（国外は英国、ドイツ、アメリカ、カナダ、韓国）から総計478人（組）が応募、様々なジャンルのユニークな作品から、3人の入選者を選出しました。

制作補助金100万円が支給された入選者は、10月14日よりプラザB1メトロアベニューのガラスケースにて作品の公開制作を行い、10月20日の最終審査により順位が決定しました。なお、本年度はコンセプト、場所性、作品の完成度を総合的に判断した結果、グランプリに達する該当作品はなく、アーティストの方々には今後更なる飛躍を期待します。

グランプリ（賞金100万円）

■該当者なし

準グランプリ（賞金50万円）

■受賞者：榎本 佳子（京都府）

受賞作：pottery



pottery(準グランプリ)

佳作（賞金30万円）

■受賞者：小松 宏誠（東京都）

受賞作：求愛しつづける時計



求愛しつづける時計(佳作)

■受賞者：太湯 雅晴（東京都）

受賞作：ASIAN NOTE



ASIAN NOTE(佳作)

各受賞作品画像は以下のURLよりダウンロードいただけます
http://www.tokyo-midtown.com/press/index_press.html

アートコンペ受賞作品は、10/23より約6か月間プラザB1メトロアベニューのガラスケースにて展示予定。

※但し、広告掲載期間を除く

<ご参考：アートコンペ概要>

応募期間：2008年6月1日～7月31日

応募総数：478件（1点／1人（組））

審査方法：プレ審査→1次審査（書類審査）→2次審査（模型によるプレゼンテーション）
→最終審査

審査員：五十嵐威暢（アーティスト／多摩美術大学客員教授）

神谷幸江（広島市現代美術館 チーフキュレーター）

清水敏男（東京ミッドタウンアートワークディレクター／学習院女子大学教授）

中山ダイスケ（アーティスト／東北芸術工科大学教授）

八谷和彦（メディア・アーティスト）

協力：TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

■本件に関するお問い合わせ先■

東京ミッドタウンマネジメント株式会社 TEL:03-3475-3141 / FAX:03-3475-3144

■掲載時の一般の方のお問い合わせ先■

東京ミッドタウン コールセンター TEL:03-3475-3100

<各コンペ 審査員総評>

[デザインコンペ審査員総評]

小山薫堂 (放送作家)

今回が初めての開催にも関わらず、こんなにたくさんの作品の応募があったということ、そして学生と一般の部の差がほとんどないレベルの高さに驚かされました。反省点としては、「もてなし」というテーマを入れたことで、応募者に少々困惑した様子が見られたこと。来年の課題テーマを考える上での、審査側の課題になったと思います。

全ての作品に賞をあげることができないのが惜しく、もったいないものばかりでした。自分自身の発想のとてもよい刺激になり、心地良い時間を過ごさせていただきました。

柴田文江 (インダストリアルデザイナー)

旅の思い出を分かち合いたいと思う心や、自分の国を知ってほしいという気持ち、贈る相手を思いやり何が喜ばれるか考える気配りをカタチにした作品が多くみられることから、お土産とはそれ自体が「おもてなし」の表現なのだと再認識させられたコンペでした。

デザインという枠を飛び出すような楽しいアイデアや、日本らしさを再構築した表現など、本コンペのテーマならではの作品の幅広さにワクワクしながら審査をさせていただきました。

内藤廣 (建築家/東京大学大学院教授)

まず最初に、千点近くに及ぶ応募数の多さに驚きました。どれも、そのまま具体化してみたいようなものばかりでした。今回の試みに対する学生やデザイナーの関心が、きわめて高かった証です。日本のデザインもまだまだやれる、いや、もっとやれる、と思いました。ここ数年、韓国勢の台頭ばかりが目立つデザイン界ですが、それはデザイナー個々の能力というより、デザインに対する認識の甘い組織の側の問題なのだ、ということ強く感じました。物理的資源の乏しい我が国では、技術と品質はもちろん大切な資源ですが、最終的にそれを社会に結びつける優れたデザイナーも貴重な知的資源であることを理解すべきです。デザインに関するこうした試みを立ち上げ、新たな街作り活動の核としていこうという主催者の姿勢と意欲に敬意を表したいと思います。

原研哉 (グラフィックデザイナー)

おみやげには、品質や風格が問われる「特産品」的な側面と、キツユクさや笑いが問われる「観光物」とでも呼ぶべき側面があり、そのどちらを重視するかのがバランスが難しかった。審査員全員が意識したのはその点であったと思う。全体の印象では学生のほうが一般よりも肩の力が抜けていた分、自由であった。

水野学 (アートディレクター)

今回のコンペでは、日本人であれば誰もが知っているようなモチーフを使った作品が数多く見られました。デザイン大国となりつつある日本には、きっと何らかの「仕掛け」があるのではないだろうかと感じます。日本には四季があり、島国として守られてきた歴史があります。また、八百万の神という考え方のおかげか、あらゆるものに対して畏敬の念が深いように思います。そのためか、感性が豊かな人が多いと感じるのです。計算、記憶、情報の整理等の作業を人間の代わりにこなしてくれる「コンピュータ」という便利な機械を誰でもが使えるようになりつつある現代においては、『感性』や『センス』、そして『デザイン』が一層求められていくと思います。20年後、このコンペで排出された日本人のデザイナーが、さらに世界を席巻していることを期待します。

[アートコンペ審査員総評]

五十嵐威暢（アーティスト／多摩美術大学客員教授）

アートを審査することはいつも難しい。限られた情報と時間の中で審査員も査定されているようなものだ。しかし、たくさんの応募作品、新しい才能との出会い、審査の過程での議論の沸騰、二次審査での作者とのやり取り、最終審査での賞の決定などを通して、この新しいアートコンペは、そのアイデンティティを確実に築き始めている。審査プロセスに於いて、若い才能を支援するという基本的な目標がたびたび確認されたが、今回は残念ながらグランプリ受賞作品は見当たらなかった。応募作品に総じて言えることは、コンセプトの明快さ、意図説明の簡潔さ、用意された展示スペース（場）に対するこだわりが一層の努力が求められていることだと思う。

神谷幸江（広島市現代美術館 チーフキュレーター）

都市の活気ある場所に作品を展示する、そのエキサイティングな魅力ある機会に、初回ながらたくさんの応募があったことに、若いアーティストの皆さんの意欲的な関心が伝わってきました。今回のコンペを通じて感じた2つのことがあります。ひとつはもっとチャレンジングであってほしいこと。発表の機会を求めるだけで、既存の作品のプレゼンテーションに終わってしまうケースも多く見受けられました。なぜこの時、この場所で、この作品を作るのか。その問いをいつも自問してほしいと思います。もうひとつは自身の作品について語る言葉が薄いこと。制作技術だけでなく、作品の背景にあるコンセプトをしっかりと打ち立て、表現者としての考えを伝えていくことの大切さと責任を改め考えてみてください。

清水敏男（東京ミッドタウンアートワークディレクター／学習院女子大学教授）

まず第一に、多くの若いアーティストが参加し、さまざまなコンペ案を提案したことを高く評価したい。今回は第1回であり方向性が見えにくかったと思うが、展示場所の特殊な条件にもかかわらず、多くの挑戦があったことを喜ぶと思う。実際、展示場所の条件は制約でもあるがさまざまなことが想定できる面白さもある。最終選考には漏れたが、コンピューターを用いた作品にも秀作があり、次回に期待したい。また絵画作品はこうしたコンペでは分が悪いが、展示方法とコンセプト次第では効果がだせると思うのでこれもまた次回を期待したい。全般的に言えることはコンセプトが弱いことであり、この場所に展示することの意味、与えられたテーマの意味をもっとよく考えてはどうかと思う。また作品の完成度を高めて欲しいと思う。今回はグランプリを選ばなかったが今後のさらなる展開を期待してのことである。

中山ダイスケ（アーティスト／東北芸術工科大学教授）

本コンペの構造、つまり、テーマに対してアイデアをプレゼンし、制作費を得て、商業施設通路を往来する一般の人々に向けて作品を掲げる。まるで駅内広告です。この特色を見抜いている応募者がとても少なかったように思います。実社会に、ホワイトキューブ的空間はほとんどありません。そして観客も、ショーウィンドウの前を忙しく通り過ぎる人々のように、それほどアート観賞に費やす時間はありません。広告と情報にあふれる街「東京」において、アートが街に飛び出す際に突きつけられる、残酷で、極めて重要な「真実」です。いつかここを制する人は「東京らしいアート」のありかたを指し示してくれる人なのでしょう。面白いコンペの誕生です。

八谷和彦（メディア・アーティスト）

今回展示された三作品は、どれも主催者や審査委員の期待に応える良い作品になったと思います。ただし、非常に残念なことです。今回は突出した印象を与える「これしかない」という作品には出会えませんでした。三作品とも「ここがこうだったら良いのに」といういわば弱点の部分があり、協議の結果（来年を期待して）、今年は「グランプリ該当なし」となりました。ただ、制作していただいた3人の作家はすでに十分な実力があり、また今後の飛躍が期待できる方ばかりだと思います。どうか皆様、3人の作家の作品を実物で見てください、できれば名前を覚えていただき、今後も注目していただければ、審査委員の一人としてこれに勝る喜びはありません。

<各コンペ 受賞者による作品解説>

[デザインコンペ受賞者作品解説]

<一般の部>

グランプリ 受賞作『さくら石鹼』（受賞者：近藤真弓）

春になると満開に咲き誇り、やがて散り消えゆく桜。古来から日本人は桜の満開をハレとして尊ぶだけでなく、散りゆく姿に儂さや無常観を見出し、愛でてきました。春が来る度見る者を楽しませ、日本人に愛される桜は日本のおもてなしの形の一つといえます。さくら石鹼は桜の花びらに見立てた石鹼で、手のひらで静かに溶けてなくなる花びらは、使う人に桜の繊細な美しさと儂さを感じさせます。

準グランプリ 受賞作 『AIR-BONSAI』（受賞者：ワビサビ）

「ダッコちゃん」などでおなじみの「ビニール人形」の技術を駆使した「ビニール・ボンサイ」です。「ボンサイ」の造形美は日本独自のものであり、その美しさは世界中の人々を魅了するでしょう。しかし、簡単に「おみやげ」になるものではありません。そこでペチャンコにして持ち運べる「AIR-BONSAI」を思いつきました。代表的な松の盆栽をモチーフに、日本の POP カルチャーをミックスした愛らしさボンサイを目指しました。

佳作 受賞作 『よろい T』（受賞者：YEN!）

あからさまなデザインのお土産 T シャツではなく、そこはかたなく日本の文化を感じさせるお土産 T シャツの提案です。

モチーフとするのは日本の戦国時代の当世具足と言われる鎧。当時の鎧は、防御としての機能と、武将の自己主張を兼ね備えたデザインを施すので、現代の T シャツの感覚と近い物があり、ベースの T シャツと同色の刺繍によって表現することにより、普段使いでも着られる、お土産 T シャツになります。

<学生の部>

グランプリ 受賞作 『HINOMARU』（受賞者：望月 未来）

日本の国旗に描かれている日の丸から着想を得た。このペーパーウェイトが真っ白な紙の上に置かれるたび、世界中どこにいても日本が思い起こされる。

準グランプリ 受賞作 『JAPANESE、FACE』（受賞者：小島 梢）

日本の「顔」を施したフェイスパック。日本独自の「顔」の文化を日本の「顔=代表」として表現したお土産です。なかなか体験する事ができない日本の「顔」を美しくなるまでの待ち時間に、楽しむ事ができます。古くから伝統として受け継がれていはいるものの、日常には浸透しにくい一見距離を感じる文化を、日常に浸透している文化に取り入れる事で、より身近な文化に感じてもらいたいです。

佳作 受賞作 『水引香』（受賞者：居郷 翔）

日本の旅を、日本の香りを嗅ぎながら思い出してもらえたらと思って香りをテーマにした。また、水引には「結ぶ」という意味があるので、もう一度日本に来てもらえるようにという願いを込めた。

<審査員特別賞>

小山薫堂賞 受賞作 『つまらないものですが。』（受賞者：富田知恵）

日本では、人に何かを献上するときに「つまらないもの」と表現する。この体（てい）を保てば、国内で何を選んでも日本のおみやげとして成立できるのではないだろうか。

何かカタチを作るとすれば、この概念の解説を付け足すことだろう。パッケージ等に同居させやすいものとして、ステッカーを制作する。

老若男女の経済状況や国籍に対応できるものとして、その選択肢を拘束しない日本の新しいおみやげのありかたそのものを提案した。

柴田文江賞 受賞作 『Moustache FUJI』（受賞者：竹内 真里子）

日本の象徴である富士山と、世界の人々のアピールポイントである髭を組み合わせ“ Moustache FUJI”を、日本の新しいおみやげとして提案する。日本独自のおもてなしの精神を尊び、存在感を示しながらも主役になるのではなく、あくまでも利用者や場を引き立て相乗させるものこそが日本のおみやげと考える。”ひげんごコミュニケーションツール”として、アレンジも楽しみながら、Meeting・Party・Summitなどで利用することによる効果は大変大きい。

内藤廣賞 受賞作 『くつくつした』（受賞者：村山 譲治）

日本特有の文化「靴を脱いであがる」ということ。

ここから生まれたおもてなしの心・作法も多いように思う。

その行為は疲れた体と心を癒す。その快感を知ってしまった外国人も多いはず。

これを何かおみやげと繫げられないだろうか。

そんな思いから、「くつくつした」は生まれました。

外国で履けば、靴を脱いでいることを知られずにリラックスできる。

全く日本の姿をしていない日本ならではのおみやげ。国内での使用には注意が必要。

原研哉賞 受賞作 『Sushi 侍すとらっぶ』（受賞者：鯨井 みなみ）

日本らしさとして寿司と侍が浮かんだのでコラボしました。

水野学賞 受賞作 『富嶽百三十九景』（受賞者：鈴木 啓太）

グラスに、日本の象徴ともいえる富士山の姿を重ねました。世界各国の様々な飲み物が注がれると、金色に光り輝く富士や、朝日に染まった赤富士、緑や雪に覆われた優美な富士など、様々な表情の富士が現れます。

葛飾北斎は浮世絵で「富嶽三十六景」描き、富士の美しい姿や日本の文化を世界に伝えました。私はこのグラスで、世界 139 カ国に、日本の美しい四季や秀麗な富士の姿を思い出させてくれる「富嶽百三十九景」を描き出したいと思っています。

[アートコンペ受賞者作品解説]

準グランプリ 受賞作 『pottery』 (受賞者：榎本佳子)

器物に施される装飾というのは、もちろん用途を無視しては成り立たないはずですが、使う為の「器」の形をしていながら、ただ飾る為だけのものが、あたりまえのように家庭の床の間や玄関といった生活空間にまで存在しています。

その矛盾に対して、違和感と共に、日本人のおおらかさと、飾りに対する愛着を感じます。はたして器と呼べるのか不明な「器」を見て、共感と違和感を感じてもらえたら、と思います。

佳作 受賞作 『求愛しつづける時計』 (受賞者：小松宏誠)

都市における時間は未来と強く結びつく。

未来についての現在は期待。

クジャクは強い期待を抱き、ポジティブな進化を繰り返しつつ、現代に至ったのではないだろうか？鳥独自の優れた飛行能力とひきかえに、豪華な装飾に身を包み、求愛するときも、外敵から身を守るときも、その羽を広げ、強く生き残っている。針がクジャクの羽に進化した時計 360 個が、求愛するかのように、いっせいに期待を刻みつづける。

「JAPAN VALUE」は強い期待の繰り返しにより進化していくのだ。

佳作 受賞作 『ASIAN NOTE』 (受賞者：太湯雅晴)

現在、ほぼ全世界的に使用されるアメリカドル、ヨーロッパ圏ではユーロ、または中東・ペルシャ湾岸地域での使用が予定されている統一通貨という、国境を越えた貨幣を流通させることで、新たな境界線が形成されつつあります。しかし、アジアでは機軸となる通貨が存在しません。

まとまりに欠くアジアという枠組みの中で、架空の新しい通貨を提案することで、アジアに於ける日本の立場を考えます。